

2023年度 ジェンダー学際研究専攻（地理学分野）博士論文要旨

周辺地域におけるケアの地理の諸相－高齢者の居住とケアの接合－（英題: Aspects of the Geographies of Care in Peripheral Areas: Connecting Inhabit and Care for Older Adults in Communities）

稲田 七海 (INADA Nanami)

論文構成

序論

- I 研究の目的と問題意識
- II 研究の背景
- III 地理学における先行研究
- IV 「ケアの倫理」と「ケアの地理」
- V 方法としての周辺地域
- VI 調査方法
- VII 論文の構成

第I部 国土の周辺地域における住み続けの維持とケアはじめに

第1章 介護保険制度の受容に伴う高齢者ケアと相互扶助の変容－上甕島旧里村を事例として

- I はじめに
- II 旧里村における生業の変容と高齢者ケアサービスの制度化
- III ローカルな実践と介護保険制度の受容プロセス
- IV 小括

第2章 和歌山県新宮市における「セーフティネットの空間」の形成とコミュニティワーク

- I はじめに
- II 研究の対象と目的
- III 研究対象地域の概要と研究の位置付け
- IV 同和地区におけるコミュニティワークの系譜
- V セーフティネットの空間を生み出す実践と生活知
- VI 小括

考察とまとめ

第II部 大都市圏内部の周辺地域における「住まう」空間の創出とケア

はじめに

第3章 釜ヶ崎のケアは誰が担うのか－「寄せ場」における居住支援と担い手の多層性

- I はじめに
- II 居住空間としての「釜ヶ崎」
- III 釜ヶ崎におけるホームレス支援

IV ネットワーク化された地域居住支援

V 小括

第4章 釜ヶ崎における単身高齢者の居場所づくり－社会的孤立を防ぐつながりの創出

- I はじめに
- II 社会的孤立と居場所に関する研究アプローチ
- III 西成区における単身高齢者の増加と居場所づくり
- IV 居場所づくり事業利用者実態調査にみる居場所の機能と役割
- V 居場所の機能と社会的つながりの構築
- VI 小括

第5章 山谷における地域生活移行支援－中間施設における居住支援の拡大

- I はじめに
- II 制度改革と「社会的入院」の解消
- III ホームレス支援における居住支援
- III 東京山谷における居住支援事業の展開
- IV 「自立援助ホーム」におけるケアの可視化
- V 小括

考察とまとめ

結論

- I 周辺地域にみられるケアの多層性
- II 「ケアの地理の諸相」を作り出すものは何か
- III 「ケアの地理の諸相」を描くことの意義
- IV 今後の課題と展望

謝辞

文献一覧

論文要旨

本研究は、周辺地域における高齢者のケアの地理の諸相 (Geographies of care) を、「住まうこと」と「ケアを受けること」が接合した空間として描き出すことを目的とし、高齢者が一人になっても「住み続け」を維持することができる地域コミュニティとはいかなるものなのかを考察するものである。

新自由主義的風潮にある現在は、自助努力や自己責任の原則に基づく規制緩和と競争が推進され、ケアの市場化が進んでいる。しかし、本研究が対象とする周辺地域では、ケアをめぐる市場原理が機能しないだけでなく、都市部への人口移動などによって高齢者の単身化が進み、家族支援を含むケア資源が不足している。こうした周辺

地域の単身高齢者のケアは、誰によって、どのように担われるのだろうか。

本研究の関心は、「ケアを担うのは誰か」というトロントによる「ケアの倫理」の問いに従うものである。このケアをめぐる倫理の問いに、「どこで、どのように」という地理の問いを接続するために、人々が生存していく上で基盤となる「住まい」に着目する。ケアを担う主体とともに場所を問うことで、個別のかつ文脈依存的なケアによって生み出される関係性の性質、範囲、距離、そして形態には、ケアが行われる空間や場所と結びつき地理的コンテキストが埋め込まれるものであることを示すことが可能になると考えるためである。

本研究は、2000年から2015年にかけて実施した四つの周辺地域におけるフィールドワークから、単身高齢者のケアの実践を具体的かつ丹念に描き出した。研究対象とした周辺地域は、国土の周辺に位置する離島地域の村(鹿児島県上甕島・旧里村)と半島地域に位置する地方都市の同和地区のコミュニティ(和歌山県新宮市)、そして、大都市の内部の周縁にある「寄せ場」(大阪・釜ヶ崎、東京・山谷)である。これらの周辺地域における単身高齢者は、「周辺」地域に住まうことと「単身」であることの重複した困難に加えて、「居住」と「ケア」を支える既存の福祉制度と住宅政策では対応できない複雑化したニーズを持つ。こうした高齢者のケアを、誰が、どこで、どのように担ってきたのかを、これらの周辺地域における実証研究から明らかにした。

第1章では鹿児島県の上甕島旧里村において、地域の伝統的相互扶助によって脱家族化されてきた高齢者在宅ケアの体制が、介護保険制度の導入によっていかなる変化を辿ったのかを明らかにした。このケア体制の変化が地域コミュニティにもたらす影響を明らかにし、単身高齢者が島で住み続けるために必要なケアの実践とはいかなるものかを考察した。第2章の和歌山県新宮市の同和地区の事例では、当該地区における女性コミュニティワーカーの私的領域と公的領域をつなぐ実践に着目し、世帯内で不可視化されたさまざまなケアニーズを掘り起こし、福祉制度につなげるまでのケア実践の展開をインタビュー調査や資料分析から明らかにした。そして、それらの多様な活動をつなぐ支援が高齢者のさらなる困窮を抑止し、地域での住み続けを支える可能性について検討した。

第3章では、寄せ場労働者がホームレスや生活保護受給者へと属性が変化するのに応じて、流動性の高い釜ヶ崎が「定住する」空間に変容する過程について検討した。多様な担い手によるケアの実践によって、居住とケアが

複合化した安定的な居住支援が実現化し、釜ヶ崎やその近隣地域には単身高齢生活保護受給者が集中するようになった。そして、第4章では、これら的高齢者を対象に大阪府が実施する「居場所づくり事業」に着目し、高齢者の社会的孤立の防止とつながりの創出を目的とする居場所の有効性について検討した。高齢者は居場所で開催される地域貢献プログラムや奉仕活動に参加することで、地域や人々の役に立つことを経験し、地域住民としての意識を高めていく傾向にあることが明らかとなった。また、居場所の拠点は、地域における多様なケアの実践の結節点となり、ケアの担い手の連携が強められる場となった。居場所事業は社会的孤立を防止するだけでなく、「定住する」空間を支えるものであることが示唆された。

第5章では、東京山谷におけるホームレスへの居住支援の取組みが、病院退院者や施設退所者の地域移行の受け皿へと拡大する過程を「自立援助ホーム」での調査から明らかにした。ここで提供されているケアをタイムスタディ調査によって数値化し、中間施設が多様なニーズに包括的に対応している実態を可視化した。一方で、行き場のない人や制度からこぼれ落ちた人々のケアを地域の中間組織に依存的に要請することの問題点を指摘した。

以上の四つの周辺地域におけるケアの地理の諸相を、「人々が地域で住まうために何が求められて、それを誰が担うか」という文脈依存的な主体間の対応関係から描き出すことで、ケアを通した「地域」の意義や役割を明瞭化し、必要なケアの配分や配置を明らかにすることができた。すなわち、地域コミュニティにおける多層的なケア実践をめぐる依存と責任には、地理的コンテキストが埋め込まれるものであり、ケアの実践も個別的な文脈に沿う地理的なものとしてとらえることが可能であることが示された。

そして、これらのケアの地理の諸相から考察される高齢者一人で住み続けられる地域コミュニティとは、第一に、「住まうこと」と「ケアを受けること」の接合を困難にする要因を軽減し、福祉と住宅の制度間の隙間を埋める多様なケアの担い手が存在すること、第二に、ケアがローカルな問題に対応するかたちで家族から地域に開かれ、それらを受け止める多層的なケア実践があるコミュニティであること、第三に、ケア実践の多様な担い手が、地域の高齢者の生活課題を共有し、「共にケアする」ことでもたらされるケアの依存と責任を通した連帯があること、これらの三つの条件によって実現されることが明らかとなった。

(主査：水野 勲)